

新版 アメリカ文学史

コロニアルからポストコロニアルまで

別府恵子/渡辺和子編著



ミネルヴァ書房

新版 アメリカ文学史

コロニアルからポストコロニアルまで

別府恵子/渡辺和子編著

江苏工业学院图书馆
藏书章



ミネルヴァ書房

<編著者略歴>

別府 恵子（べっふ・けいこ）

ミシガン大学大学院博士号取得。

松山東雲女子大学学長，神戸女学院大学名誉教授。

主 著 *The Educated Sensibility in Henry James and Walter Pater*, 松柏社，1979年。

『現代アメリカ女性作家の深層』（共著）ミネルヴァ書房，1984年。

『アメリカ文学における女性像』（共著）弓書房，1985年。

『イーディス・ウォートンの世界』（編共著）弓プレス，1997年。

『アメリカ小説の変容』（共著）ミネルヴァ書房，2000年。

渡辺 和子（わたなべ・かずこ）

大阪大学大学院修士課程修了。

京都産業大学外国語学部教授。

主 著 『現代アメリカ女性作家の深層』（共著）ミネルヴァ書房，1984年。

『性差と文化』（共著）玄文社，1988年。

『イーディス・ウォートンの世界』（共著）弓プレス，1997年。

新版 アメリカ文学史

—— コロニアルからポストコロニアルまで ——

1989年5月20日	初版第1刷発行	検印省略
1999年4月30日	初版第9刷発行	
2000年3月25日	新版第1刷発行	定価はカバーに 表示しています

編 著 者	別 府 恵 子
	渡 辺 和 子
発 行 者	杉 田 啓 三
印 刷 者	田 中 雅 博

発行所 株式会社 ミネルヴァ書房

607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
電 話 (075) 581-5191番
振替口座 01020-0-8076番

©別府恵子・渡辺和子，2000 創栄図書印刷・清水製本

ISBN4-623-03198-5

Printed in Japan

新版『アメリカ文学史：コロニアルから ポストコロニアルまで』出版にさいして

『アメリカ文学史：植民地文学からポストモダンまで』を出版して、10年の歳月が流れた。20世紀最後の10年間、それまで以上に、政治、文化、経済的変化が加速された。とくに1989年、東西ドイツを隔ていたベルリンの壁が崩壊し、米ソの冷戦時代に幕が閉じられ、アメリカ一頭の世界情勢が生まれた。一方で、世界各地で民族紛争が噴出、あらたな独立国が設立した10年であった。植民地支配の終焉、第二次世界大戦の決着がようやく進み、香港、マカオ、パナマ運河の管理がそれぞれ主体国に返還される。

15, 6世紀にはじまったヨーロッパ列強国による植民政策の結果、17世紀初頭に北米大陸に英国植民地が誕生した。1783年、英国植民地が本国から独立して欧米系白人の「アメリカ合衆国」が建設された。この10年間における世界の動向は、「アメリカ合衆国」の始まりをあらためて問う契機を提供する。20世紀は、モダニズムで始まり「ポストモダン」を経て、ポストコロニアル時代をもたらし、多文化主義の社会を形成してきたのである。

そこでこのたび、変容する歴史、社会のコンテクストのなかで「アメリカ文学史」の読み直しをおこなうことにした。『アメリカ文学史』の副題を『コロニアルからポストコロニアル』として、次のような点を配慮して本書を改訂、増補して新版『アメリカ文学史』を出版することになった。

- ・アメリカの歴史を北米大陸の先住民の歴史からとらえ、ヨーロッパ列強国の植民地支配の歴史を加えて、その記録文学を対象のなかに入れた。すなわち、文学史の時代区分は旧版を踏襲したが、「第Ⅰ部 1620—1820」を、コロンプスの「新大陸発見」以前を踏まえ、「1492—1820」とした。
- ・全体にジェンダー、人種、階級などの差異の視点を入れて、各章に加筆修正を加えた。
- ・とくに、「第Ⅴ部 1945—現代」においては、この10年間の新しい文学（小説、詩、劇）、批評の主な動きを大幅に加筆した。

・なお、呼称や表記上、多文化主義の視点から「インディアン」「黒人」などについては「先住民」「アフリカン・アメリカン」と書き換えたが、歴史／時代的コンテキストから旧版のままにした場合もあることを断っておく。

旧版と同様に、本書がアメリカ文化／文学，ひろくアメリカ社会に関心をもつ読者の参考になれば幸いである。

1999年12月

編 者

はしがき——序にかえて

本書は、アメリカ文学を学ぶ人たちのために編集されたアメリカ文学史の概説書である。

文学史のとらえ方は、アメリカという国の独自性・伝統をどこにみるか、変化していく評価をどこにおくかによっておのずと異なってくるであろう。そのためかこれまでにそれぞれに工夫がなされた「アメリカ文学史」が、多く編まれてきた。本書もこの点に留意して、時代や作家が必然的に与えてくれる視点、さらに執筆者の個々の視点をとおして、作家の存在の意義づけを多角的にとらえることを試みた。さらに、さまざまな文学的アプローチが試みられている1980年代末という時点からみて、作家とその作品が時代の流れのなかでそれぞれにどのような意義があったかを浮かびあがらせ、そのとらえ方や解釈に少しでも新しい視点を提供するように努めた。

アメリカ合衆国において自国の文学史が成立してまだ一世紀にも満たない。1920年代でもなお、アメリカ文学は多くの大学ではイギリス文学の一部であって、独立した学問体系にはなっていなかった。一方、MLA（全米近代言語学会）で最初のアメリカ文学のセッションが開かれ、*American Literature*（1929—）誌が創刊され、最初の文学史『ケンブリッジ・アメリカ文学史』（*The Cambridge History of American Literature*, 1917）が編まれたのもその頃であった。つまり、この頃アメリカ文学史は批評家や研究者によって意図的につくられたのだった。さらに大学でアメリカ文学が採用されるにつれ、教授陣が主に白人男性であったために、白人男性作家がアメリカ文学史を占めるようになったという歴史的事実を忘れてはならないだろう。1950年代になると女性、少数民族の作家が排除される傾向はいっそう顕著となった。

しかし、1960年代から70年代に公民権運動、大学紛争、女性解放運動などが起こり、大学のカリキュラムが解体、再編成されるにともない、アメリカ文学史においても西欧系の白人男性作家中心の傾向がゆらいできた。アメリカの歴史が、いわゆるコロンブスの「アメリカ発見」からはじまるとみなすこ

との誤謬も、インディアンと呼ばれるアメリカ先住民の文化、文学の見直しによって指摘された。このような状況から「アメリカ文学の再構築」が模索されている。そしてアメリカ文学が西欧系白人男性だけではなく、これまで沈黙させられてきた民族、女性の文学を含むべきであるということが、「黒人研究」、「エスニック研究」、「フェミニスト文学批評」、「カルチュラル・スタディ」などによって主張されている。1980年代半ばには、その成果の一端があらわれはじめ、ノートン、ケンブリッジ、マクミラン社などアメリカの大手出版社があい次いでアメリカ文学作品集を改編し、『コロンビア・アメリカ合衆国文学史』(*Columbia Literary History of the United States*, 1988)のような新しい文学史が出版された。

いま文学史を編集するさいにこのような動きを無視するわけにはいかないが、しかし文学史の情報としては従来の文学史を否定することもできないだろう。本書では以上のような動向をふまえて、これまで重要とみなされた作家とその作品、さらに基礎的な文学史上の事項を一とおり網羅しながらも、さらにこれまであまり重視されなかった作家や作品もとりあげるように努めた。

本書の構成は、アメリカ合衆国の植民地時代から1987年までを、文学に直接、間接に少なからず影響をおよぼしたと思われる戦争、つまり独立戦争、南北戦争、第一次、第二次世界大戦を節目に、第Ⅰ部：1620—1820、第Ⅱ部：1820—1865、第Ⅲ部：1865—1914、第Ⅳ部：1914—1945、第Ⅴ部：1945—現代の五部に分けた。各部の冒頭には、「時代思潮」として、その時代の政治、経済、宗教、文化の流れを概観し、文学をつくりだすそれぞれの時代背景を素描した。

さらに各時代の文学を小説、詩、散文、劇、批評という文学ジャンル別にとりあげた。これらのジャンル配分は時代によって異なり、歴史書、説教、日記など記録文学が中心だった第Ⅰ部や、散文のジャンルがきわだった第Ⅱ部、また詩がほとんどめだたず、欠落している第Ⅲ部、批評が文学研究の主流の一つになるほど隆盛を極める現代まで、時代に即応したジャンル配分を考慮したつもりである。また、これらのジャンル別の章の冒頭には、「概観」を設けて、そのジャンルにおける文学の流れとその特徴についての概説を付

記した。

本文は、ジャンル別の章分けのなかをさらに細かく分けられた時代にそって作家別に区分した。そのなかでアメリカ合衆国の揺籃期から独立を経て、変動期から世界大国としての確立期の文学を、作家論を中心に叙述した。というのも、個々の作家の登場がおのずと文学史を織りなしていくと考えるからである。しかし、第二次世界大戦以降についてはなお作家の評価も流動的なので、作家論よりも同時代の作品群がつくりだす文学の傾向に注目した作品論となっている。こうして本書の副題を「植民地文学からポストモダンまで」とした。

このような構成からなる本書にも文学史作成上の問題点がいくつかあり、それに対する創意も本書では試みた。まず、紙数が限られているためにどの時代、どのジャンルにしても存分に作家論が展開させられるとはかぎらない。そこで作家を羅列するよりも、各時代を代表していると思われる作家とその作家の特徴を浮かびあがらせられると思われる作品に焦点をあてた。また作家に関しては、文学史辞典を参照すれば明らかになるような事実の紹介はなるべく割愛した。

次に、戦争によって分けられた時代区分も、それらが統一された一つの文学の流れのなかにあるのではなく、多様な異なる流れが入りくんでいる。さらに、文学の流れを包括的な潮流としてみることに個別の作家、作品の分析とは必ずしも一致せず、流れに逆らうことを特徴とする作家も多い。いくつかのジャンル、文学潮流にまたがり、地域性を特徴とする作家もいる。これらを補うために、同時代作家を示すジャンル別の作家の生没の年表、作品の出版年と背景となる主な出来事を組み入れた年表、アメリカの文学を地域的に理解するための合衆国地図、英語名を付記した作家、および作品、重要事項を網羅した索引を付した。また年表には、各年のアメリカ文学の批評家や読者の評価を反映していると思われるピューリッツァ賞、全米図書賞を受けた作品を明示してある。これらの資料はアメリカ文学史を時代と地域にわたって多層的に理解するための一助となるであろう。

このような点から、本書は文学史やアメリカ文学セミナーなどのテキストとして最適であろう。本書がアメリカ文学の入門者、研究者にとってさらに

研究の糸口を開いてくれることになれば幸いである。

最後に、限られた枚数のなかで各章に新しい視点を入れるように苦慮されながら、健筆をふるってくださった執筆者の方がたに感謝したい。そして全体のバランスから完成原稿を削除、変更してもらった箇所があったことを申しそえておく。また、ミネルヴァ書房の杉田啓三氏には編集にかかわる貴重な助言をいただいたことを述べて、感謝の意を表したい。

1989年3月

編 者

目 次

新版『アメリカ文学史：コロニアルからポストコロニアルまで』出版にさいして
はしがき——序にかえて

地 図

I 1492—1820

〈時代思潮〉 新大陸の発見…(2) 北アメリカの探検…(2) 植民地の創設…
(3) 植民地における分離主義と非分離主義…(4) マサチューセッ
ツ湾植民地における非分離主義…(4) ピューリタニズムの衰退…
(5) 拡大する新大陸と啓蒙思想…(5) 大覚醒…(6) アメリカ革
命…(7) 合衆国憲法と領土の発展…(7)

第1章 散 文——9

〈概説〉 先住民の口承文学…(9) 探検者による記述…(9) 記録文学…(9)
ピューリタンの文学…(9) 独立期の文学…(10)

1 16世紀——先住民の時代 10

(1) 先住民の文化 10

(2) コロンブスと探検者たち 11 スペインの威力…(11) 先住民との交流
…(11)

2 17世紀前半——新大陸探検とピューリタニズムの時代 12

(1) スミス、ヒギンソン、バード 12 スミスと紀行文…(12) 北部のヒギン
ソン…(13) バードと新大陸像…(13)

(2) ブラッドフォード、ウィンスロップ、コットン 13 『プリマス植民地』…
(13) 「丘の上の町」…(14) 回心体験告白…(15) 日記文学…(15) 「空
白の土地」…(15)

3 17世紀後半——ピューリタニズムの衰退 16

(1) インクリース・マザー、ローランドスン、シューアル 16 「エレミアの
嘆き」…(16) ローランドスンとピューリタン信仰…(17) シューアルの

『日記』…(18)

- (2) コットン・マザー 18 『不可視の世界の驚異』…(18) 『アメリカにおけるキリストの大いなる御業』…(19)

4 18世紀前半——理性の時代 20

- (1) エドワーズ 20 「怒れる神の手のなかの罪人たち」…(20) エドワーズの評価…(20)
- (2) フランクリン 21 ヤンキーの父…(21) 『自叙伝』その他…(22)
- (3) ウールマンとバートラム 23 『ウールマンの日記』…(23) 『バートラムの旅』…(23)

5 18世紀後半——アメリカ独立の時代 23

- (1) トマス・ペイン 23 『コモン・センス』と『人間の権利』…(23) 『理性の時代』…(24)
- (2) ジェファスンと連邦主義者たち 24 独立宣言…(24) 『ヴァージニア覚え書』…(24) ジェファスンの理論…(25) 連邦主義者たち…(25)
- (3) クレヴクールとブラウン 25 「アメリカ人とは何か」…(25) アメリカ小説の父…(26)

第2章 詩——27

〈概説〉 ピューリタンの想像力…(27) 新天地の歌…(27)

1 17世紀——植民地時代 28

- (1) ブラッドストリート 28 詩作する女性…(28) 女性としての視点…(29)
- (2) テイラー 29 瞑想詩と形而上詩の伝統…(29) 「洪水に寄せて」…(30)

2 18世紀——共和国形成時代 30

- (1) フリノー 30 アメリカ独立革命の詩人…(30) ロマン主義詩人の先達…(30)
- (2) パーロウ 31 偉大なアメリカの叙事詩…(31) 冗長な詩の雄大な構想…(31)
- (3) フィリス・ウィートリ 31 「黒人文学の母」…(31) 敬虔な宗教心と愛国的言説…(31)

II 1820—1865

〈時代思潮〉 国民意識の高揚…(34) 民主主義の確立…(35) 新しい思想…(35)
 超越主義思想…(36) マニフェスト・デスティニー…(37) 南北対立
 の表面化…(37)

第1章 散 文—39

〈概説〉 国民文学を求める声…(39) コンコードの超越主義グループ…(39)

1 超越主義の時代 (I) 40

- (1) エマスン 40 『自然論』…(40) 「アメリカの学者」…(40) 「神学部講演」…(41) 「自己信頼」…(41) 自然の位置と役割…(42) 「対応」の原理…(43)
- (2) ソロー 44 全体像…(44) 自然観…(44) 野性…(45) 『ウォールデン』の構成とテーマ…(45) 「市民としての抵抗」…(47) ネイチャーライティングの始祖…(47)

2 超越主義の時代 (II) 48

- (1) エマスンの周辺作家——チャニング 48 人間尊重の先駆者…(48) 奴隷制反対論…(49)
- (2) エマスンの周辺作家たち——オールcottとフラー 50 実践的超越主義者オールcott…(50) フェミニズムの先駆者フラー…(51)

第2章 小 説—53

〈概説〉 アメリカ小説の誕生に向けて…(53) アメリカ小説の誕生——同時代へのアンチテーゼ…(53) 象徴主義と小説における新たな試み…(54) 女性作家と家庭小説…(54)

1 ロマン主義時代 (I) 54

- (1) アーヴィング 54 イギリスへの郷愁と現実からの逃避…(54) 人生の傍観者…(55)
- (2) クーパー 56 クーパーの現状認識…(56) 『革脚絆物語』…(56) アメリカ神話の批判…(57)

2 ロマン主義時代(Ⅱ) 58

- (1) ポー 58 閉ざされた空間…(58) 葛藤を欠いた一人芝居…(58) 「奔と振子」…(59) 感性と知性の共存…(59) 批評家ポー…(60) ポーの再評価…(60)
- (2) ホーソー 61 ビューリタンの過去…(61) ロマンズと心の真実…(61) 「僕の親戚、モリノー少佐」…(62) 『緋文字』…(62) 『七破風の屋敷』…(63)
- (3) メルヴィル 64 水夫体験…(64) 「人間は天使か犬か」…(64) 時代批判と孤立…(65) 実験小説…(65) 『白鯨』…(66)

第3章 詩—68

〈概説〉「伝統派」と「実験派」…(68) 南北戦争の詩…(68)

1 ロマン主義時代(Ⅰ) 69

- (1) ポーとエマスン 69 ポーの「詩の原理」…(69) 詩人としてのエマスン…(69)
- (2) プライアント、ロングフェロー、ホイットマン 70 「アメリカ詩の父」…(70) 「水鳥に寄せて」…(70) 「アメリカ国民詩人」…(71) ロングフェローの功績…(71) “Schoolroom Poet”…(72)

2 ロマン主義時代(Ⅱ) 73

- (1) ホイットマン 73 ホイットマンの現代性…(73) リンカーン追悼詩…(74) アメリカの叙事詩…(74)
- (2) ディキンソン 75 ディキンソンの現代性…(75) ディキンソンの自然詩…(76) 愛と死のテーマ…(77) ディキンソンと現代女性詩人…(77)

III 1865—1914

〈時代思潮〉 南北戦争後の近代化…(80) 産業化と都市化…(80) 金メッキ時代…(82) 労働運動の激化…(82) 革新時代…(83) 資本主義, 市民文化, 消費文化の形成…(84)

第1章 小 説——86

〈概説〉 南北戦争後のアメリカ文学…(86) リアリズム文学の形成…(86) ジャーナリズム, 大衆文学の形成…(86) 地方色文学の形成…(87) 女性作家の活躍…(87) 自然主義文学の形成…(88)

1 リアリズム文学の時代 (I) 88

- (1) トウェイン 88 新しい文学の誕生…(88) 『ハックルベリー・フィンの冒険』…(89) 金メッキ時代の文明批判…(90) 晩年のトウェイン…(91)
- (2) ジェイムズ 92 ジェイムズ文学の誕生…(92) 異文化体験…(93) 心理的リアリズム小説…(94) 金銭の世界…(95) ジェンダーとアメリカ女性…(95)
- (3) ハウエルズ 96 批評家ハウエルズの小説…(96) 『卑近な事例』…(97) 『サイラス・ラバムの向上』…(97) 社会風俗的リアリズム…(98)
- (4) アダムズ 99 歴史家アダムズ…(99) 『ヘンリー・アダムズの教育』…(99) 金メッキ時代批判の小説…(100)

2 リアリズム文学の時代 (II) 100

- (1) 地方色文学 100 地方色文学とハート…(100) 地方色作家たち…(101)
- (2) ニューイングランドの地方色作家たち 102 ストーと地方色文学…(102) ジュエット…(102) フリーマン…(104)
- (3) ショパン, ギルマン, ウォートン 105 ショパンと『めざめ』…(105) ギルマン…(106) ウォートン…(106) 『歓楽の館』…(107) 『ジ・エイジ・オブ・イノセンス』…(108)

3 自然主義文学の時代 109

- (1) クレインとノリス 109 自然主義文学の台頭…(109) クレイン…(109) ノリス…(111)
- (2) ドライサーとロンドン 111 ロンドン…(111) ドライサー…(112) キャリーの「欲望」…(112) 『アメリカの悲劇』…(113)

第2章 劇——115

〈概説〉 植民地時代の演劇…(115) 革命時代とそれ以降の作家…(115)

1 アメリカ演劇の先駆者たち 116

ヨーロッパ劇の模倣…(116) ブーシコールト…(116) デイリー…(116)
ハワード…(117) ベラスコ…(117)

2 マッケイとムーディ 117

マッケイ…(117) ムーディ…(118)

IV 1914—1945

〈時代思潮〉 両大戦のはざま…(120) 狂乱の20年代…(120) 1920年代の影…
(121) ジャズエイジ…(122) 崩壊…(123) 苦難の時代…(124)

第1章 小 説——125

〈概説〉 アメリカ文学の国際化・普遍化…(125) アメリカ文学の深化…(125)
文学をめぐる状況…(125) 20年代と30年代の文学…(125)

1 モダニズムの時代 126

(1) キャザーとスタイン 126 キャザー…(126) スタイン…(127)

(2) ルイスとアンドラスン 128 ルイス…(128) アンドラスン…(129)

2 1920年代 130

(1) フィッツジェラルド 130 ジャズ時代の物語…(130) 『偉大なるギャ
ツビー』…(132)

(2) ヘミングウェイ 133 個と全体…(133) 『ニック・アダムズ物語』…
(134)

(3) フォークナー 136 ヨクナパトーフアの内と外…(136) 「熊」…(137)

(4) ドス・パソスと「ハーレム・ルネサンス」 139 ドス・パソス…(139) 『U
S A』三部作…(139) 「ハーレム・ルネサンス」…(139)

3 1930年代 140

(1) ウルフとコールドウェル——南部の作家たち 140 ウルフ…(140) コ
ールドウェル…(141)

- (2) ファレルとオルグレン——中西部の作家たち 141 『スタッズ・ロニガン』三部作…(141) オルグレン…(142)
- (3) スタインベックとサロイアン——西部の作家たち 143 スタインベックの主要作品…(143) サロイアン…(144)
- (4) ミラーとウェスト 145 ミラー…(145) ウェスト…(145) その他…(146)

第2章 詩——147

〈概説〉 アメリカ詩のルネサンス…(147) 「シカゴ・ルネサンス」…(147) モダニスト…(147) 「ハーレム・ルネサンス」と「サザン・ルネサンス」…(147)

1 アメリカ詩確立の時代 148

- (1) シカゴ・ルネサンスの詩人たち 148 シカゴ・ルネサンス…(148) マスターズ…(148) 『シカゴ詩集』…(149) リンジー…(150)
- (2) モダニズムの先駆者たち 151 伝統と新しい声…(151) フロスト…(152) 『ボストンの北』…(152) ジェファーズ…(153)

2 モダニズムの時代 154

- (1) パウンド 154 パウンドのモダニズム…(154) 『キャントーズ』…(155)
- (2) エリオット 155 『荒地』…(155) 『四つの四重奏』…(156) スタイン…(157)
- (3) 瞑想と凝視の詩人たち 157 スティーヴンズ…(157) ウィリアムズ…(158) 『パタスン』…(158)

3 モダニズム展開の時代 159

- (1) ムア、カミングズ、クレイン 159 アメリカ現代詩…(159) ムア…(159) ワイリー、ミレー、パーカー…(160) カミングズ…(160) クレイン…(161) ハーレム・ルネサンス…(162)
- (2) 新批評の詩人たち 162 サザン・ルネサンス…(162) ランサム…(162) テイト…(163) ウォレン…(163)

第3章 劇——164

〈概説〉 ヨーロッパの新劇運動の影響…(164) アメリカにおける小劇場…(164)

大学付属劇場…(165) 1920—30年代の劇作家…(165)

1 1920年代 165

- (1) オニール 165 初期の作風…(165) 『楡の木陰の欲望』…(166) 斬新な舞台装置…(166) 第三期の作品の特徴…(166) 『地平線の彼方』…(167) 『皇帝ジョーンズ』と『毛猿』…(167) 晩年のオニール…(168)
- (2) ライス 168 新しい作劇の試み…(168) 『計算機』…(169)

2 1930年代 169

- (1) アンダスン、キングスレー、シャーウッド 169 経済大恐慌の影響…(169) 『ウィンターセット』…(170) キングスレー…(170) 『デッド・エンド』…(170) シャーウッド…(170)
- (2) グリーンとワイルダー 171 南部出身の作家グリーン…(171) ワイルダー…(172)
- (3) オデッツ 172 オデッツ…(172) 『レフティを待ちつつ』…(173)
- (4) ヘルマン 173 『子どもの時間』…(173) 『子狐たち』…(174)

V 1945—現代

〈時代思潮〉 戦後世界の二極構造化…(176) 50年代——アメリカの世紀…(177) 50年代——大衆社会の出現…(177) 開かれた60年代…(178) 60年代——若者革命…(179) 不確かさの70年代…(180) 70年代——ミーズムの時代…(181) 70～80年代——保守主義の台頭…(181) 80～90年代——東西冷戦の終結とアメリカの再生…(183)

第1章 小説——185

〈概説〉 1945年から1960年頃まで…(185) 1960年頃から1970年代半ば頃まで…(186) 1970年代半ば頃から80年代まで…(187) 1980年代から現代まで…(188)

1 1945年から1960年頃まで 189

- (1) メイラーとジョーンズ——戦争小説 189 メイラー…(189) ジョーンズ…(190)
- (2) 南部の作家たち 191 ウエルティ…(191) マッカラーズ…(191) オコ